

# 第14回 新五流総フォローアップ委員会 議事要旨

日 時：平成29年9月25日（月）9：30～12：00

場 所：岐阜県水産会館 2階 中会議室

## 1. 議事

### (1) 新五流域総合治水対策プランの進捗報告

- 1) プランの進め方について
- 2) ハード対策について（河川改修、耐震化、長寿命化）
- 3) ソフト対策について

### (2) 地域委員会の報告について

- 1) 揖斐川流域
- 2) 木曾・飛騨川流域
- 3) 宮川流域

### (3) その他

- 1) 「水防災意識社会再構築ビジョン」を受けた取組みの実施状況報告
- 2) 「大規模氾濫減災協議会」への移行に関して

## 2. 議事要旨

### (1) 新五流域総合治水対策プランの進捗報告

議事の項目1)、2)および3)の内容について事務局から説明があり、質疑応答や意見交換がなされた。各項目について交わされた質疑応答や意見交換の主な内容は以下の通りである。

- ・宮川流域の太江川は進捗率0%だが計画策定と記載されている。それ以外でそのような箇所はあるか。また、調整が必要な場合、それが済むまで用地買収は行えないのか。  
→ 太江川については、鉄道橋の架け替えの必要があり関係機関との調整を進めている。同様に、揖斐川流域の白石川では農林水産省の補助整備事業等との調整を図る必要があり、関係者調整を進めている。調整が済み次第設計を行い、それに基づいて用地買収を行うことになる。
- ・川づくりの実施内容とモニタリングとは対応させる必要がある。内容に対するモニタリングを実施して、目標が達成できているか確認する必要がある。  
→ 事後モニタリングなど行い事業にフィードバックしていくことは重要だと考えている。必ずしも全河川についてそういった対応が徹底しているとはいえないの

- で、そういったところも含めて検証をしていくような取組みを考えていきたい。
- ・資料に記載されている改修延長よりも、さらに改修が必要になる箇所はないのか。  
→ 平成26年の新五流総プラン改定時に設定した区間についても、浸水被害等の状況の検証を継続して必要な箇所は工区を追加している。
  - ・今回対象としている改修事業は、河川堤防への地震の影響については考えられていないようだが、検討が必要ではないか。  
→ 河川施設の耐震性については、河川構造物を堤防と堤防以外とに分けて考えてきている。一般の堤防は土でできているので比較的復旧は容易と考えられる一方、コンクリート製や鋼製等の構造物はそうではないため、優先的に耐震に取り組むべきと考えている。そのような構造物である、堰、水門、樋門・樋管、排水機場、陸閘といった施設を概ね10年ほどで耐震化し、その後、堤防の耐震化に着手する予定である。
  - ・長良川流域の中川逆水樋門のゲート扉体については、2～3年で対策を行わなければならないという評価になっているが、当初の修繕計画には反映されていない。どのように対応していくのか。  
→ 毎年の点検で確認された劣化状態に基づいて再評価している。ご指摘の状態まで点検結果が下がったものについては、2～3年の間に対応したい。
  - ・木曾・飛騨川流域の大ヶ洞ダムも同様の状況であるが、修繕計画はどのようになっているのか。  
→ 主に設備関係についての評価であり、マニュアルでは、信頼性評価に基づいた取替えや更新年数の設定ではなく、一定の年数を過ぎれば交換することが推奨されているので、平成32年までに、それに沿った更新を検討していきたい。
  - ・揖斐川流域の旧水門川排水機場のクレーンについては撤去するということであるが、保守時における撤去したクレーンの代替手段は考えているのか。  
→ 旧水門川排水機場については、国土交通省の新水門川排水機場との統合計画が具体化されつつあるため、最低限の長寿命化、耐震化を進めていかなければならない状況にあり、建屋の耐震性を優先して撤去とした。クレーンが必要となるような事態には、門型の仮鋼台をつくって吊り上げることでポンプ更新等への対応が可能であると検討結果が示されている。
  - ・魚道について、資料2によると、平成24年度の評価結果に対して長良川以外ではほぼ整備されたということで、長良川の残りは13である一方、資料3のフィッシュウェイサポーターによる点検結果ではC評価が28となっている。この点についてどう考えているのか。  
→ 資料2には、24年度の総点検でC評価になったものの残数で、今年度末には0になる予定である。一方、資料3の点検結果は毎年の評価によるものを単純集

計して28年度末について記入したものである。毎年の点検結果を分析して、予防保全的な修繕として簡易な工事や土砂撤去を行い、C評価になる前に対応したいと考えている。

- そうした対応には、洪水等の影響を受けても魚道が十分機能しているところとそうでないところのデータがあると役立つ。
- 上流と下流をつなげれば改善されたということになるとは必ずしも限らない。つなげることで特定外来生物の往来が可能となり、生態系に悪影響を与える場合もある。修繕の効果についてこの点の検証を行っているか。
  - これまでに整備されてきた魚道について、整備当初の効果を維持・発現させるために点検と補修を行っているので、元来つながっていたものと見なしていることになる。遡上に関しては、どれだけの魚が上っているのか、どのような種類の魚が上っているかという調査を年間1~2箇所魚道について発注し、検証を行っていく。特定外来生物の移動については、早急に検討していく必要があると考えている。
- 国土交通省の管理河川では想定最大規模の降雨を対象とした洪水浸水想定区域図が公開されているが、県の状況はどのようになっているのか。また、それらの区域図を反映したハザードマップの更新にあたって、今後、県と市とはどのように連携していくのか。
  - 県管理河川においても、62河川で作成した既存の洪水浸水想定区域図について、想定最大規模の降雨を対象としたものへの更新を平成28年度から開始し、31年度完成を目標に進めている。県や国から公表された洪水浸水想定区域図を用いて、市町村がハザードマップの作成を進めていく手順となっており、その過程で県は技術的な支援をしていくという状況である。
- 浸水深が10mを超える場所であるとか、浸水継続時間が1週間など長期にわたる箇所もあるが、そのような状況をどのようにして住民に周知するのか。
  - ハザードマップの作成・公表・配布といった作業を通じて、市町村が住民に周知していくことになる。住民への周知は市町村の仕事と位置付けられているが、そこで河川管理者が協力を求められれば、対応していく。
- 貯留効果については、例えば最低限何パーセント整備されるとこの程度水位が下がるといった効果を示しながら進めていかないと、市町村も施設整備の効果が理解できず進捗しないのではないか。市町村との交渉では、どのように説明をして貯留施設の整備を要請しているのか。
  - 流域貯留施設の効果を全体的に示したものはない。個別河川では、例えば都市化が進んでいる岐阜市の境川流域とか、大垣市の水門川流域において流域整備計画というものを持っていて、ある規模の降雨に対してこれくらいの貯留施設があれば効果が見込めるので整備して頂きたいということで治水対策を進めてきている。効果の適切な検証については課題としていきたい。

- ・多数の流域貯留施設の整備を進めるとそれらの維持管理が大変になる。改修によって河川で対応できるのであれば、必要性の低いところはやらないなど、明確にすべきではないか。
- 境川流域や水門川流域では河川改修のみの対応では限界があるため、流域貯留を計画に取り込んでいる。流出抑制対策だけでなく、土地利用の抑制について、現在は農地を宅地に転用する場合などに制約があるだけだが、例えば、頻繁に浸水が想定される区域では、ピロティー構造にするなど、地域の危険性の情報を共有しながら取組みを議論していけるよう努力したい。その中で、貯留施設の効果も的確に示していかなければならないと考えている。
- ・高山市などの観光客への水害時の対応については、特に取り上げられていないようであるが。
- 市に詳しく問い合わせたことはないが、観光客への対応は必要であるという認識を持っているとは聞いている。

## (2) 地域委員会の報告について

議事の項目1) 2) 3) の内容について事務局から説明があり、質疑応答や意見交換がなされた。各項目について交わされた質疑応答や意見交換の主な内容は以下の通りである。

### 1) 揖斐川流域

- ・桂川について、河床洗掘を防ぐと書いているが、護岸の下のところに石がたくさん置いてあり、河床幅が狭くなっていて、これで河床洗掘が防げるか疑問である。また、桂川の勾配がさほど急ではない桂川で、なぜ寄せ石工としたのか、コンセプトを知りたい。
- 寄せ石をしたのは植生の回復を主の目的として、自然の流れで洲が付きやすくなることを狙って施工している。河床洗掘は、河床勾配がさほどないということのみお筋を固定しても生じないと考えている。
- ・川幅を過度に狭めることで河床洗掘を生じさせる可能性は否定できない。河床洗掘を防ぐため、植物を生やすためというが、そもそも施工前の写真を見るとそれほど自流がないので、放っておいても植物は生えるのではないか。河床洗掘を防ぐため、植物を生やすためというが、護岸のそばに捨石を行う効果が良くわからない。植生予測の根拠など改めて考え直してほしい。
- 今後の課題とさせていただきたい。
- ・護岸を入れたところは粗度が低くなりやすいので、流れを抑制しているとか、多孔質にしているという効果はある。経過を見ながら考えていただきたい。
- ・白石川の改修では、河道設計支援ツールを使って、流れとか流砂について事前に評価されたということか。
- 改修計画において立案した河道形状について、支援ツールを使って瀬、淵、砂

州などが川の流れによってどのように発生するかをシミュレーションし、評価に努めている。

## 2) 木曾・飛騨川流域

- ・久々利川の川づくりの目標ではスライドダウンを行うとなっているが、現状が良ければスライドダウンでその状態を維持するということである。写真等を見ると現状は平瀬であり良い川の状態ではない。また、緩勾配から急勾配にすると、当然河川の形状は変わってくるので、どういう川づくりが良いのかということをちゃんと議論して記録に残すべきである。

→ スライドダウンという術語は、現在の川幅を1.5倍に広げるなかで、現在の川の流れの幅を維持するような形で掘削することを表現しようとしたものである。

- ・川を広げたらどのように砂州がつくかなどの予測が必要である。その川の形状と平常時の水を利用してすむということで生物相が決まる。物理的な理由・根拠をもって川づくりをしなければならない。

## 3) 宮川流域

- ・質疑における発言等はなかった。

## (3) その他

1) 「水防災意識社会再構築ビジョン」を受けた取組みの実施状況報告

2) 「大規模氾濫減災協議会」への移行に関して

議事の内容について事務局から説明があり、質疑応答や意見交換に移ったが、特段の発言等はなかった。

- ・「大規模減災協議会」への移行について承認された。

以上